

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

悪魔に像を売った男たちシャミツソー,ホフマン,エーヴェルスの三作品の研究III

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2006-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/848">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/848</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



悪魔に像を売った男たち  
シャミツソー、ホフマン、エーヴェルスの三作品の研究  
III

南 はるつ

第3章『プラークの大学生』(Der Student von Prag)

1913年制作 無声映画『プラークの大学生』

演出： シュテラン・ライ (Stellan Rye)  
脚本： ハンス・ハインツ・エーヴェルス (Hans Heinz Ewers)  
撮影： グイド・ゼーバー (Guido Seeber)  
音楽： ヨーゼフ・ヴァイス (Prof. Josef Weiss)  
出演者： 〈バルドゥイン〉 パオル・ヴェーゲナー (Paul Wegener)  
          〈伯爵令嬢マルギット〉 グレーテ・ベルガー (Grete Berger)  
          〈花売り娘ルドウシュカ〉 リーダ・ザルモノーヴァ (Lyda Salmonova)  
          〈冒険家スカピネリ〉 ヨーン・ゴットヴェット (John Gottowt)  
          〈シュバルツェンベルク伯爵〉 ロタール・ケルナー (Lothar Körner)  
          〈シュバルツェンベルク男爵〉 フリッツ・ヴァイデマン (Fritz Weidemann)  
制作会社： ドイツビオスコープ社 (Deutsche Bioscop GmbH)

1820年。プラークの大学生バルドゥイン (Balduin) はプラーク最強の学生剣士といわれていたが、お金もなく憂鬱な日々を送っている。ある日彼は、怪しい力を持っているという噂のある、得体の知れない冒険家スカピネリ (Scapinelli) と散歩していた時、伯爵令嬢マルギット (Comtesse Margit) の命を救った。その瞬間から彼は彼女の虜になり、翌日見舞いを口実に伯爵家を訪れるのだが、身分の違いを思い知らされ途方にくれて帰宅する。そこへあのスカピネリが訪ねてきて、10万グルデン金貨と引き換えに「この部屋にあるもの」と交換しないかともちかける。バルドゥインが喜んで引き受け、署名をして契約書 (1820年5月13日付である。) にサインすると、スカピネリは鏡の中から巧みにバルドゥインの鏡像を連れ出して去っていった。彼は自分に鏡像がなくなったことを知り愕然とする。

裕福になったバルドゥインはマルギットに接近し、彼女も彼の愛に応える。しかし彼女は父親の意向でいとこのヴァルディス・シュバルツェンベルク男爵 (Baron Waldis-Schwarzenberg) と婚約していた。2人の関係を知った男爵と口論の末、剣で決闘をすることになった。伯爵はバルドゥインが名剣士であることを周知していたので、彼を訪ねてきて、男爵は妹の一人息子で一家の跡取りだ、どうか殺さないで欲しいと頼む。バルドゥインは男爵を傷つけないことを約束する。しかしスカピネリの陰謀で、彼は時間通り取り決めた決闘の場所に行くことができず、彼のいない間に鏡像、つまり彼の分身がすでにライバルを殺してしまっていた。そのことをバルドゥインは伯爵令嬢に釈明に行くが、無駄であった。その上この時に彼女は彼に鏡像がないことに気づき、驚いて失神してしまう。どこから入ってきたのか、彼の分身も令嬢の部屋に入ってきた。彼は慌てて逃げるが、分身はどこまでも追いかけてくる。彼は絶望し、自分の不気味な分身に決闘を申し込み、彼をピストルで撃ち殺す。しかし彼の弾丸が当たったのは彼自身の胸であった。彼は無惨にも血を流して死ぬ。そのすぐあとにスカピネリが部屋に入ってきて、彼の死体のかたわらで契約書を破り捨てせせら笑った。最後のシーンでは彼の分身がバルドゥインの墓の上に座っているのだが、これは映画の中で何回か引用されているアルフレッド・デ・ミュッセ (Alfred de Musset) の詩の最後の句を忠実に表現している。

Ich bin kein Gott,

bin kein Dämen

Doch sprach der recht /

der mir im hohn

Einst Deinen eignen

Namen gab !

Wo bist / werd' auch

ich stets sein

Bis zu der Stund' wo

auf dem Stein

Ich sitze über deinem

Grab

Alfred de Musset

おれは神でも

悪魔でもないが

悪魔から

お前と同じ名前を

付けられた！

お前のいる所に

絶えず私もいるだろう

お前の墓の上に

座る時まで

アルフレッド・ド・ミュッセ

## ハンス・ハインツ・エーヴェルスの生涯

ハンス・ハインツ・エーヴェルスは数々の怪奇幻想小説を生んだ作家である。1871年11月3日にデュッセルドルフ（Düsseldorf）で生まれた。父のハインツ・エーヴェルスは風俗、歴史画を専門としていた宮廷画家であった。母のヨハンナ・ネボムツェーナ（Johanna Nepomucena）は名門一族の出身で、自ら童話を書き、翻訳の仕事も手がけた。エーヴェルスは大学で法律を学び、法学士の学位を得、司法官試験にも合格した。しかし三年後には辞職し、ジャーナリズムの世界へ転じた。絵画、文学、政治など多方面の評論、エッセイを発表し、テオドール・エツェル（本名シェルツェ、Theodor Schulze, 1873-1930）と共同で『芸術の友』（Der Kunstfreund）を発刊、作家としての道を歩み始めた。そののちベルリンに赴き、「ユーバーブレットル」（Überbrettli）という寄席で専属の詩人になった。そののち自らが座長となって巡演するが、経済的に行き詰まってしまう。その間にも『磔にされたタンホイザー』（Der gekreuziger Tannhäuser, 1901）、『刑罰物語』（Hochnotpeinliche Geschichte, 1902）、『売られた祖母』（Die verkaufte Großmutter, 1903）、エッセイ『キャバレー』（Der Cabaret, 1904）、『現代文学案内』（Führer durch die moderne Literatur, 1905）、『ポー論』（Edgar Allan Poe, 1905）などを発表した。その後も『恐怖』（Das Grauen, 1907）、『取り憑かれた人々』（Die Besessenen, 1908）、『魔法使いの弟子』（Der Zauberlehrling, 1910）、そして彼の著作の中で最も売れた『アルラウネ』（Alraune, 1911）を書いた。『プラークの大学生』は1913年の作品であるが、その後の映画の発展に大きな影響を与えた。

1914年、第一次世界大戦が勃発した時、エーヴェルスは旅行中でキューバにいたが、帰国することができなかったため、中立国アメリカに赴き、ドイツ文化の啓蒙宣伝活動に従事したが戦後1920年に帰国した。その後ナチスにも傾倒し、ヒトラーの依頼で一般青少年及びSA隊員向けの英雄伝説『ホルスト・ヴェッセル』（Horst Wessel, 1932）を執筆、1933年には党の宣伝のために映画化された。しかしナチス内部の勢力争いに巻き込まれ、有らぬ嫌疑をかけられたため、ナチスの正体を知り、その後はむしろ多くのユダヤ人と親交を持ち彼らを援助していた。1943年6月12日に進行性老人結核のため、ベルリンで亡くなった。

## アルフレッド・ド・ミュッセ

劇中に詩を引用されているアルフレッド・ド・ミュッセ（Alfred de Musset）はフランスの詩人で、ルソーの研究家としても有名である。1810年12月11日、パリのノワイエ通りで生まれ、一時期を除いては、ずっとパリ市内で暮した。ミュッセの父は15世紀にまでさかのぼる由緒ある貴族の出身で、詩や小説を書く文才に溢れた官僚だった。母もまた上流階級の家系に生れた上品で知的な女性であった。9歳でパリの名門校アンリ4世校に入学、最終学年で全国学力コンクールに入賞する等、非常に優秀であった。17歳の時から詩作を始め、19歳の時に

「スペインとイタリアの物語」(Contes d'Espagne et d'Italie, 1830) でデビューし、傑作の数々は全て 20 代の頃の作品で、「マリアンヌの気まぐれ」「ロレンザッチョ」「戯れに恋はすまじ」等は、現代でも頻繁に上演されている。晩年の彼は病気に苦しめられる。29 歳の時ピストル自殺を図ったことがあった。30 歳で肺炎, 34 歳で肋膜炎を患う。1847 年に, 10 年前の戯曲「気紛れ」がロシアで大あたりし, その後パリで上演されて大変な評判になった。その後, 彼の作品は次々と舞台上で演じられることとなった。そして 1852 年にアカデミー・フランセーズ会員に選ばれた。同年, 詩選集 (主に 30 歳以前の作品を集めたもの) を出版し, 多くの人々から支持され, 再評価が高まった。1857 年, 47 歳のとき大動脈疾患と過剰なアルコール摂取により, その短い生涯を閉じた。

### 「プラークの大学生」の成立背景

1913 年の「プラークの大学生」の最初の映画化は, ドイツ映画史の作品中で最も成功した, 世界市場をも征服した無声映画である。この作品はそもそも映画美術への最初の進出であり, これまでに存在していた作品よりもかなり芸術的な映画で, ドイツにおける映画芸術の発祥であり, 新しい形式で, 真に映画的なアイディアに従って要求の多いテーマを創作するという初めての試みでもあったと言われている。

活動写真, つまり映画という技術は 1895 年, フランスのリュミエール兄弟によって発明された。それと同じ頃にエジソンもキネトスコープを発明していたが, 両者ともこの発明を重要視していなかった。ジョルジュ・メリエスという人物がリュミエールから特許権を買い, 撮影所を建設し, 数々の映画を制作したのが映画の発端である。そののちアメリカ, イタリア等に広まっていく。ドイツでも映画の発展に尽力した監督がいたが, この頃映画はキントップ (Kintopp) と呼ばれ, 舞台演劇よりもはるかに地位が低かった。もっともそれは当たり前のことで, とても芸術作品とは言えない代物だったからである。技術的な質がよくなかったことはもちろん, 内容的にも単純な形式のメロドラマ的な低俗なもので, 観客も労働者や浮浪者であった。ただどの時代にも見られるように, その種の低俗なものは繁栄する。生産過剰な状況で, 映画館も各地に増加していき, 1 回に何本もの映画が上演された。教育関係者も新聞も社会にとって有害なものだと批判した。エーヴェルス自身も映画技術の可能性には肯定的だったものの, この時期の映画作品自体には否定的であった。

エーヴェルスはこの時期, あらゆる可能な限りの領域におけるロールフィルム (カットフィルムまたはシートフィルム) の無限の可能性を指摘している。それで彼はハノーレンドンナ広場の映画館が 1910 年末に聴衆をモーツァルトホールに招待した時, 「映画の驚異」について講演をし, そのすぐあと 1911 年 3 月にベルリンで発行された「第一国際映画新聞」においては, プログラムの問題について意見を述べている。彼は自分の報告の中で, 医学の分野や工業, それと同時に極めて多種多様な広告手段としての映画の将来的な役割を指摘し, たとえば地方で

わずかな報酬しかなくても上演できるように、重要な演劇を記録するというトーキー（発声映画）とその可能性について語っている。

この時期に映画劇場に蔓延していた有声映画は、エーヴェルスによれば、何か怪物のような蓄音機が恐ろしい物語を出していて、限りなく悪趣味なオペラやオペレッタのさまざまなシーンを何かバラエティーに富んだものやバレエやセンチメンタルな作品の録画に当てはめているという代物であった。彼はマックスリンダーやアメリカのカーボーイやインディアンの決闘の映画を優遇したが、しかし聴衆を近くや遠い国々へ旅させる映画を高く評価し、また気晴らしのためには、イタリアの映画会社の幅広い歴史的な戯曲も気に入っていた。そういった興味を彼はいわゆる映画日報、たとえばパーテ・ジャーナルの中で示した。1911年4月の「第一国際映画新聞」がいわゆる映画祭——それはおそらくドイツの映画史上初めてのことで、ベルリンの「エスプラナーデ」において選び抜かれた聴衆の前で上演された——を開催し、エーヴェルスは「ドイツ月曜日新聞」の記事の中で「第一国際映画新聞」がおそらく財政豊かな外国の映画工場主の興味を引き起こしたこのにぎわいにも堂々と苦情を言った。彼は警察の検閲やドイツの映画会社の欠乏した大胆さを基礎として、国内産の映画について幅広く考えて欲しいとそれ以前にしばしば嘆き、悪趣味な宣伝だと思いつつもドイツの映画新聞や外国の映画工場を援助していた。しかしその映画祭の招待客であったエーヴェルスによれば、この開催地では冷めた食事、ゼクト、ビールの他いくつかの映画を提供されたが、しかしそれはドイツの古い映画だけだった。

1909年に最初のドイツの芸術映画を制作する必要があると演出家で作家のハインリッヒ・ボルデン・バエッカーズ（Heinrich Boltzen-Baekers）は要求している。その概念は1907年から08年の映画危機への答えとして、「映画芸術」という形でフランスからやってきた。バエッカーズは聴衆が単純な形式のメロドラマやキーントップ映画を支配している、いつも同様の「おかしな」追跡にますます飽き飽きしているというのである。そののち4年たってやっとドイツでの「芸術作品」が生まれ、大成功を収めた。

1913年のある日、ドオイツェ・ビオスコープ社の社長エーリヒ・ツァイケ（Erich Zeike）がエーヴェルスのもとを訪問し、「芸術作品」を作りたいと提案した。エーヴェルスは彼の依頼を引き受け、以来ビオスコープ社で映画制作に従事することになった。

「プラークの大学生」は撮影の際、プラークの役所や町の貴族からは大変好意をもって援助され、エーヴェルスはプラークのとても美しい場所をロマンチックな作品に使うことに成功した。すでに映画のタイトルの冒頭の字幕の中で上演されているオリジナルの場面は古いユダヤ人のお墓であると言われている。前述したようにこの時までの映画に出演することは、有能な舞台俳優たちにとってタブーであったが、この時期からは状況が変わった。特にこの作品においてはプラークの舞台の多くの有名な人気のある俳優たちが競演することを名誉と思い、有名な優れた演出家もその仕事の大成功に対する関心を持っていた。

初演は1913年8月22日にベルリンモーツァルトホールで行われた。「プラークの大学生」はこの時に開催された映画フェスティバルのクライマックスで、大好評を博した。新聞をはじめ、多くの批評家たちがこの作品の芸術性を絶賛した。エーヴェルスやツァイケの意図した、さらに遡れば、バエッカーズの意図したドイツにおける芸術的な映画作品の時代が始まったのであった。日本においても1913年に弁士徳川夢声によって初演された。

ビオスコープ社は映画の封切りの後、すぐにもう積極的な新聞の発言や批評の多数の記録をまとめた。この記録は映画専門誌の記事や映画館所有者のための特集号として広まっていた。「プラークの大学生」への映画批評を特集している記事はたとえば「映画記録人」(Der Kinematograph) (349号, 1913年9月3日, 350号, 1913年9月10日), 「Lichtbildbühne」(35号, 1913年8月30日, 67-70ページ)そして「第一国際映画新聞」(Ersten Internationalen Film-Zeitung, 35号, 1913年9月6日, 1-3ページ)に掲載された。

#### バルドウィン役 パオル・ヴェーゲナー

「プラークの大学生」はパオル・ヴェーゲナーの最初の映画ではなかった。すでにベルリンの「ドイツ・ビオスコープ社」が制作した「誘惑者」にグレーテ・ベルガー (Grete Berger) やリーダ・ザルモナーファー (Lyda Salmonova) とともに出演していた。監督はマックス・オーバル (Max Obal) で、エーヴェルスも作家として関与していた。ヴェーゲナーはのちに彼の伝記作家カイ・メラー (Kai Möller) に、自分はこの映画を粉々にしたいくらいに気に入らないと言っている。エーヴェルスも同様に感じていたが、この主張に反して、1913年6月13日にこの作品とそののちの作品「プラークの大学生」が検閲された。その上その映画が上演されてしまったのである。このような最中、ヴェーゲナーはこの機会にカメラマンや「ドイツ・ビオスコープ社」の責任者ガイド・ゼーバー (Guido Seeber) とコンタクトをとっている。二人はドッベルゲンガーを素材にした映画を実現できないか話し合った。つまりそもそも「プラークの大学生」は彼の提案で生まれたものである。彼の愛読書の中にE・T・A・ホフマンの作品も含まれていた。彼は誰もまだ達成していない映像技術、つまりホフマンのドッベルゲンガーや鏡像のモチーフを映画で映像化できないかと考えたのである。

#### 演出家 シュテラン・ライ

シュテラン・ライは1870年7月4日コペンハーゲンで生まれた。デンマークの将校の家庭の息子だった彼は、若い頃に軍隊の道に入り、1900年に少尉に任命された。数年後レイは詩や短編を書き始め、その中でたびたび自分の軍隊での体験を編集する。作家ヘルマン・バンク (Herman Bang, 1857-1912) との親交によって文学的な野望が掘り出された。

1906年、彼の最初の作品をコペンハーゲンの劇場で演出した。そののちいくつかの舞台で





しかしこの作品も話題作となり、その芸術性が認められた。

### 1935年制作の「プラークの大学生」

演 出： アールトゥール ロビンソン (Artur Robison)  
脚 本： ハンス・カイザー (Hans Kyser), アールトゥール ロビンソン  
撮 影： ブルーノー・モンディ (Bruno Mondi)  
音 楽： テーオー・マックエーベン (Theo Mackeben)  
出演者： 〈バルドゥイン〉 アドルフ・ヴォールブリュック (Adolf Wohlbrück)  
          〈オペラ歌手ユーリア・ステラ〉 ドローテア・ヴィエック (Dorothea Wieck)  
          〈カルピス博士〉 テオドール・ロース (Theodor Loos)  
          〈ヴァルデイス男爵〉 エーリッヒ・フィートラー (Erich Fiedler)  
制作会社： アリアンツ音声制作会社 (Cine-Allianz Tonfilm Produktion GmbH)

この作品においては、ストーリーや登場人物に若干の変更が見られる。1880年のプラーク。バルドゥインはオペラ歌手ユーリア・ステラに恋をするが、貧しい学生の彼にとっては別世界の人間である。しかしかつてのユーリアの恋人、カルピス博士が彼の鏡像を奪った時にこの状況が変化する。バルドゥインは賭をしてユーリアの婚約者ヴァルデイス男爵から財産を奪う。男爵はそののちすぐに彼に決闘を申し込むが、ユーリアが男爵の命を奪わないで欲しいと懇願する。しかしカルピス博士の陰謀による彼の嫉妬心と、さまよっている彼の鏡像が彼を激昂させ、彼は男爵を殺してしまう。亡霊から逃れるためにバルドゥインは自分の鏡像を撃つが、彼自身が死んで床に倒れる。

ここではヒロインの名前が「ユーリア・ステラ」に変更されているが、この名前は両方ともE・T・A・ホフマンの作品からの引用だと推察される。またオペラ歌手というのもその影響であろうか。こういった点からこの「プラークの大学生」をホフマンの世界により近づけようとしている意図がわかる。年代も1880年に変更されているのはどういうわけだろうか。また大きな変更点としては、彼自身が男爵を殺していることである。しかしこれらの改善も失敗に終わる。この作品は1913年の第1作、1926年の第2作ほど好評ではなかった。

(本学講師＝ドイツ語担当)

### 参考文献

#### 【和書】

ミヒャエル・エンデ『子供の世界』南道子他編 (同学社・1987年)  
フランツ・カフカ『カフカ全集2』前田敬作訳 (新潮社・1981年)

ハンス・ユルゲン・ゲールツ『ドイツ文学の歴史』ワイマル友の会訳（朝日出版社・1987年）  
 ニコライ・ゴーゴリ『世界文学全集 10 ゴーゴリ』中村融・横田瑞穂・倉橋健訳（河出書房新社・1963年）  
 ゴーゴリ『外套・鼻』平井肇訳（岩波書店・1938年）  
 ゴーゴリ『集英社ギャラリー [世界の文学 15] ロシアⅢ』水野忠夫他訳（集英社・1990年）  
 アルベルト・フォン・シャミッソー『影をなくした男』池内紀訳（岩波書店・1985年）  
 シャミッソー『ドイツロマン派全集 第5巻 フケー・シャミッソー』池内紀訳（国書刊行会・1983年）  
 シャミッソー『シュレミール奇譚』手塚富雄訳（地平社・1947年）  
 ヴィンフリート・フォロイント『ドイツ幻想文学』深見茂訳（彩流社・1997年）  
 E. T. A. ホフマン『ホフマン短編集』池内紀訳（岩波書店・1984年）  
 ホフマン『ドイツロマン派全集 第13巻 ホフマンⅡ』前川道介他訳（国書刊行会・1989年）  
 ホフマン『ホフマン全集 第1巻 カロ風幻想作品集Ⅰ』深田甫訳（創土社・1976年）  
 ホフマン『ホフマン全集 第2巻 カロ風幻想作品集Ⅱ』深田甫訳（創土社・1979年）  
 トーマス・マン『ドイツロマン派全集 第10巻 ドイツロマン派論考』佐藤恵三訳（国書刊行会・1984年）

池内紀・恒川隆男・楡山哲彦編『ドイツ名句事典』（大修館書店・1996年）  
 石井靖夫『ドイツ・ロマン派運動の本質』（南江堂・1978年）  
 岡田朝雄、リンケ珠子『ドイツ文学案内』（朝日出版社・1979年）  
 酒巻和子『名作オペラブックス 14・オッフェンバック ホフマン物語』（音楽之友社・1988年）  
 関楠生『ドイツ名作が面白い』（同文書院・1994年）  
 茅野蕭々『独逸浪漫主義』（齋藤書店・1948年）  
 深見茂他編『ドイツ短編小説の系譜』（クヴェレ会・1977年）  
 吉田六郎『ホフマン—浪漫派の芸術家』（勁草書房・1971年）  
 渡辺格司『十九世紀の欧州比較文学』（第三書房・1953年）  
 『世界の幻想文学』（自由国民社・1998年）  
 『岩波・西洋人名辞典』（岩波書店・1956年）  
 『広辞苑 第4版』CD-ROM、マルチメディア版（岩波書店・1996年）  
 『大辞林 第2版』（三省堂・1995年）754頁

#### 【洋書】

Joachim Bark, Dietrich Steinbach, Hildegard Wittenberg : Geschichte der deutschen Literatur 2, Klassik Romantik, Ernst Klett Verlag, 1983  
 Albert von Chamisso : Peter Schlemihls wundersame Geschichte, Philipp Reclam jun. Stuttgart, 1980.  
 Albert von Chamisso : Peter Schlemihls wundersame Geschichte, insel taschenbuch 27, Insel Verlag 1973  
 Hermut H. Diederichs : Der Student von Prag / Einführung und Protokoll, FOCUS-Verlagsgemeinschaft Robert Fischer, 1985  
 Wilhelm Ettelt : E.T.A.Hoffmann-Der Künstler und Mensch, Königshausen + Neumann, 1981  
 Robert Fischer : Albert von Chamisso- Weltbürger, Naturforscher und Dichter, Erika Klopp Verlag, 1990  
 Susanne Gröble : Literaturwissen · E. T. A. Hoffmann, Universal-Bibliothek Nr. 15222 Philipp Reclam jun. GmbH & Co. Stuttgart, 2000  
 E.T.A.Hoffmann : Die Abenteuer der Silvesternacht, insel Taschenbuch 798, Insel Verlag, 1984  
 Reinhold Keiner : Hanns Heinz Ewers und der Phantastische Film, Georg Olms AG, Hildesheim, 1988  
 Franz Kafka : Beschreibung eines Kampfes und andere Schriften aus dem Nachlaß, Fischer Taschenbuch Verlag, 1994  
 Günter Saße : Interpretationen · E. T. A. Hoffmann Romane und Erzählungen, Universal-Bibliothek Nr. 17526 Philipp Reclam jun. GmbH & Co. Stuttgart, 2004  
 Helmut Schanze : Romantik-Handbuch, Alfred Kröner Verlag, 1994  
 Hartmut Steinecke : Literaturstudium · E. T. A. Hoffmann , Universal-Bibliothek Nr. 17605 Philipp Reclam jun. GmbH & Co. Stuttgart, 1997  
 Dagmar Walach : Erläuterungen und Dokumente · Albert von Chamisso / Peter Schlemihls wundersame Geschichte, Universal-Bibliothek Nr. 8158 Philipp Reclam jun. GmbH & Co. Stuttgart, 1982  
 Albert von Chamisso- Weltbürger, Naturforscher und Dichter, Erika Klopp Verlag, 1990  
 Literatur Studium, Interpretationen Erzählungen und Novellen des 19. Jahrhunderts / Band 1, Universal-Bibliothek Nr. 8413, Philipp Reclam jun. GmbH & Co. Stuttgart, 1988